

特別支援教育実践コース

笹原 佳華

私は、1年間臨時講師として働いた後、この教職大学院に入学しました。臨時講師として、発語の困難な子どもであっても、表情や指さしなどで思っていることを伝えてくること、彼らなりに周りを見て要求をする相手を考えていること、繰り返し学習することで生活に活かせるよう少しずつ力をつけていることなどの様子を間近で見ながら、障害のある子どもたちと触れ合ってきました。その中で難しいと感じたのは、子どもたちがどのような気持ちであるのか読み取る必要があることです。障害の種類が同じであっても、子ども一人ひとりによって実態は大きく異なります。好きな物や得意なことはそれぞれありますが、その中でも全員が主体的に取り組み、達成感を感じて活動することができるような授業づくりが行えるようになりたいと考えました。大学院で学ぶことで、現職の先生方の経験を聞くことができたり、それに基づいた協議をしたりすることができるため、自分自身の経験や学びを深められると思いました。1年次での体験だけでも、講義や演習を通して、専門性を高めることにつながったと考えます。

実習では、子どもとの信頼関係を築くことはもちろん、目標を見据えた上で適切な支援を行って手立てを考察していかなければならないと強く感じました。子どもから「先生」として指導を受け入れてもらうためには、長期的な視点で見た働きかけが必要であり、日々の言葉かけや休み時間での遊び等も大切なかかわりの時間となりました。実践研究においても、教師や友達とかかわりながら主体的に授業に向かえるようにするために、子どものできることを適切に把握し、省察を重ねていくことが重要だと学びました。

特別支援学校の教員となったとき、子ども一人ひとりが成長していくために必要な実態把握や環境設定、教材・教具の工夫などを行い、講義や実習を通して得た知識や技術、実践力を、現場で還元していきたいと考えます。